

武蔵野日曜聖書講筵

黄金律

——マタイ伝第7章12節——

1983年1月16日

小池辰雄

「この故に」 聖霊の愛 愛せざるを得ず 聖書は無限の泉 新約的黄金律 ホワイト・ホール

【マタイ7】

12 然らば凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

●「この故に」

これはギリシア語を直訳すると、

「人々の汝になさんことを欲することすべてをそのように汝らもまた彼らになせよ。これは律法であり預言者である」

となる。ルカ伝6章31節に、

「なんじら人に為られんと思ふごとく人にも然せよ」(ルカ6・31)

とある。ルカ伝にはあい前後して愛のことが書いてある。マタイ伝の方には

「これは律法なり、預言者なり」

という非常に総括的な判断が出ているわけです。

ギリシア語でこの「ウン」というのは「この故に」という字ですが、

「何が、『この故に』だ?」

と学者はいろんなことを言う。前の句の、

「然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わらざらんや。然らば……」

と読んでいて、別にそんなに疑問に思わないけれども。

「これはちよつと続きが……」

なんて言つて、すぐ論理的に考えるものだからね。ルターは

「これは山上の垂訓の今までのものを全部ひつくるめて、『この故に』と言つた、非常に強い『この故に』である」

というようにことを言つてます。そういう考え方もできると思います。ということは、「律法なり預言者なり」という、旧約を総括して、要するに旧約は



「凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。」

に尽きるんだと。だから、山上の告白ですつと言われたことをひつくるめて、『この故に』と言ったと。なかなかルターの掴み方も素晴らしいと思います。むしろ、論理的でなくて、『この故に』というのは、今、大体ルターが言ったように大きくつかんで、

「そういうわけだから」ということ。前の句そのものにも決してつながらないことはないですよ。

「天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わらざらんや。だから、お前たちも……」

と。そういった直接の気持と、それから大きな気持と両方、両義的に含んだ、そういう『この故に』であると、私はむしろそういった両義的にとりたいと思います。

論語の中に、

「子貢問うて曰わく、一言にして以て終身これを行ふべき者ありや。子の曰わく、其れ恕か。己れの欲せざる所、人に施す勿かれ。」（『論語』衛霊公第十五）

とある。「恕」は「思い遣り」ということです。恕は仁とか愛に通ずる。「恕」という気持がすぐ

「己れの欲せざる所、人に施す勿かれ」

ではないけれども、もうひとつ註を加えたようなわけです。

「思い遣りが無いといかん」

と言って、「欲しないことはするな」と。だから

「よく思いやってやりなさい」

と。多少、消極的な言い方ですね、「欲せざる所を人に施す勿かれ」だから。

「欲するところを人に施せ」

というなら、これはキリストの言葉です。孔子の道徳はどちらかというところ、「勿かれ」という気持の言葉が多いかもしれません。

『中庸』の中にも似たような言葉がある。

「これを己れに施して願わざるところのもの、また人に施す勿かれ」

と。似たような言葉は、ローマのセネカという哲学者の言葉に、

「自分たちが受けよと思つよつに、そのよつに与えなければならぬ」とある。

● 聖霊の愛

それではいつたい、人にしてもらいたいと思うことは、何でも無条件に人にしていいか。しかしながら、人に為られんと思うことが、やってもらいたいと思うことが律法に反したり、福音に反するような欲であったら、これはダメです。そういうことをキリストは何も条件



づけて仰らないけれども。人間は欲がたくさんありますから、そのように律法や福音に反するような事柄であつたら、この言葉があてはまらないわけです。キリストが仰っているのはもちろん、

「これは律法なり預言者なり」

と言われているように、内容が真理に即したことについて言っておられるわけです。マタイ伝22章34節から読みます。

「³⁴パリサイ人ら、イエスのサドカイ人らを黙さしめ給いしことを聞いて相集り、³⁵その中なる一人の教師師、イエスを試むる為に問う、³⁶『師よ、律法のうち孰の誠命が大なる』³⁷イエス言い給う『なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思を尽くして主なる汝の神を愛すべし』³⁸これは大にして第一の誠命なり。³⁹第二もまた之にひとし『おのれの如く、なんじの隣を愛すべし』⁴⁰律法全体と預言者とは此の二つの誠命に依るなり』(マタイ22・34〜40)

これがもうピタリ、答えになるわけです。即ち、「律法なり預言者なり」とキリストが言われた、「その如く人にも為よ」ということは要するに、内容は愛であるわけです。

「おのれの如く、なんじの隣を愛すべし」
「なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思を尽くして主なる汝の神を愛すべし」と。

「おのれの如く、なんじの隣を愛せよ」

というのは、自分を愛するということは——自己愛というのは、これはみんなが本能的にもっている。けれども、

「己を愛するのは罪の最大のものである」

という言葉がある。

「己を憎まなければ私の弟子とはなれない」

と。キリストの言葉は矛盾しているかと思うけれども——

「己を愛するということがいかに自然の本能であるか。しかし、それをひっくり返

せ。その強さをもって隣人を愛せよ」

ということですが。

「己も愛していいが、隣も愛していい」

ということではない。己を愛するというのは、普通の意味においては我執の方になる。我

執的な自己愛というものは罪なんだから。キリストは、「己を愛する」ということを

「その度合いでもって」

と言われたんで、自己愛というのは、その度合いはみんなしょうがない。

「己を愛してください」

なんて手紙でも書くけれども、本当はあれは困るんだ。私はほとんど「己を愛」と書いた



ことはないかもしれない。

この自愛、自己愛というものはしょうがないんだ。みんな本能的に持っている。どうにもならないから。ところが、このどうにもならないものを、どうにかしてくださったのが、申し上げているとおり、キリストの十字架だから。

「**己を憎まずば**」

というが、これはなかなか憎めない。ところが、もうこんなものは問題でなくなってしまう。それは十字架においてです。それを私は無、賜りたる無と言っているわけです。私は、

「**相対的人間小池が無私になりきっている**」

なんて言っているのではない。私は死にいたるまで罪びとにすぎません。けれども、無私の、無の現実をその根底に賜っているから、これはありがたい。本当に賜っている。これはうそでも偽りでもない。これは本当のことです。そこには聖霊がくるから、光がくるからね。楽ではない。

それは自愛ではない。逆に、愛他です。他を愛する。隣人を愛する。隣人愛です。これできないんだ、なかなかこれが。何か力が来ないと。上から力が来ないと。聖霊の愛が来ないと。それは相対的にはできませんよ。できますけれども、決定的な徹底的な意味においては、上からこないとできない。

だから、「これは律法なり、預言者なり」という。もう結論はちゃんと出ている。マタイ伝22章39節のところは大事なところですね。

●愛せざるを得ず

マルコ伝にも似たような言葉がある。

「²⁸学者の一人、かれらの論じおるを聞き、イエスの善く答え給えるを知り、進み出でて問う『すべての**誠命**のうち、何か第一なる』²⁹イエス答えたもう『**第一は是**なり』イスラエルよ聴け、主なる我らの神は唯一の主なり。

³⁰なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主なる汝の神を愛すべし」³¹第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる**誠命**はなし』(マルコ12・28〜31)

これは申命記に出てくる言葉です。申命記6章4節はもうイスラエルの子どもはみんな知っている。

「⁴イスラエルよ聴け、我らの神エホバは唯一のエホバなり。⁵汝心を尽くし精神を尽くし力を尽くして汝の神エホバを愛すべし」(申命記6・4〜5)

このところは「隣り」のことは書いてない。これはレビ記19章に出てくる。

「¹⁷汝心に汝の兄弟を悪むべからず必ず汝の隣人を**勸戒**むべし。彼の故によりて罪を身にうくる勿れ。¹⁸汝仇をかえすべからず、汝の民の子孫に対して怨



を懐くべからず。己のごとく汝の隣を愛すべし。我はエホバなり。」(レビ19・17〜18)

この「我はエホバなり」が大事な重みです。

「私はエホバの神だから、だから、己のごとく汝の隣を愛しなさい」と。パウロはローマ書13章で、

「汝等たがいに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。9 それ『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ』と云えるこの他なお誠命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』という言の中にみな籠るなり。10 愛は隣を害わず、この故に愛は律法の完全なり。」(ロマ13・8〜10)

と。律法を全うするものは愛であると。これは非常に大事な言葉です。

それから、コリント前書13章はいうまでもない。「愛の讃歌」という。

「13 げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり」(コリント前13・13)

という。ペテロもパウロもヨハネも結局、帰するところはみな愛です。ガラテヤ書5章13節にも出ている。

「13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反って愛をもて互に事えよ。14 それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣を愛すべし』との一言にて全うせらるるなり」(ガラテヤ5・13〜14)

愛が本能にならなくてはいかんというわけだ。己を愛することは本能だからね。汝の隣りを愛することが第二の本能にならなくては。「愛すべし」ではなくて、

「愛せざるを得ず」

ということ。愛することは自然であるということなのです。

ヨハネ書簡ももちろんそうです。どこを開いたつて、でつくわすでしょ。ヤコブ書2章8節にもあった。

「汝等もし聖書にある『おのれの如く汝の隣を愛すべし』との尊き律法を全うせば、その為すところ善し。……13 憐憫を行わぬ者は、憐憫なき審判を受けん、憐憫は審判にむかいて勝ち誇るなり」(ヤコブ2・8…13)

と。愛は審判に打ち勝つという。だから、

「人に為られんと思う如く、その如く人にせよ」

という内容は要するに、人間はみな愛を求めているんです。人間に限らない。動物でもそうですよ、犬でも。愛されんことを求めている。みんな、人間は愛されんことを求めている。一番飢えているものは愛なんです。だから、その飢えているように人を愛しなくてはいか



んと。愛するとまた、自分は本当に幸いになる。

「愛さざるものは幸いならず」

と言ったつていいわけだ。

「幸いなるかな、愛する者」

という言葉はないけれども。「憐れみある者」はあるね。

「幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん」(マタイ5:7)

と。「憐れむ」という言葉は或るひとつの方向をもっているけれども、「愛」という言葉は非常に内容が広いです。

●聖書は無限の泉

それで、結論はそれでいいんですか。何か足りなくないですか。

「律法なり預言者なり」

とは、

「旧約聖書なり」

ということですが。ところが、「律法なり預言者なり」とキリストは仰ったけれども、本当は

「これは新約なり」

と言いたいわけなんだ、私に言わせると。さっきのお言葉は「これは旧約なり」ということだ。

「これは新約なり、福音なり」

となると、内容はもうひとつ高次にならなくてはならない。

私は聖書の解釈をしているのではない。いわゆる聖書解釈はたくさん本があります。私の言っている中にも解釈もあるでしょう。けれども、解釈でなくて、聖書は無限の泉だから、無量無限の泉、滾々として湧き出る真理の泉です。聖書を読みながら、新しくそこからどしどし聖霊の知恵と力で、泉を掘り出すんです。聖書は、泉を掘り出して、そこに告白しているひとつのサンプルなんだ。この聖書の驚くべき根源のサンプルにぶつかると、御霊の光でぶつかると、そこからまた真理の泉が湧いてくる。無限の宝庫なんだから、この聖書は。

そういうようにして、我々がキリストの言を、あるいはパウロの言、預言者の言をきつかけにして、そして、真理を汲み出してくる。私はそれが本当の聖書の読み方だと思います。文字に絶対にとらわれない。学者の、

「これはこうだ、ああだ」

と、そういう研究はたくさんある。悪くはないよ。けれども、それはご苦労さんはなした。聖書が一番欲しているのは、

「この無限の聖書の根源語からたくさん真理を汲み出してくれ」



ということ。その人その人を通して、聖書的思想が、また行為が展開していかなければならない。それが本当に聖書が求めていることなんです。だから、いわゆる学術的研究なんてものは第二義的な意味しかもっていない。聖書は、かくのごとくして、神による創作をしていくわけです、神による創作を。

「それは勝手だ」

なんて言うかもしれないが、勝手じゃないです。それが本当なんだ。

●新約的黄金律

「これは律法なり預言者なり」

は、私は

「これは福音なり」

と言いたい。それでは、「福音なり」とはどういうことか。

「私がお前たちを愛したように」

という言葉がその奥になればダメなんです。キリストが

「私がお前たちを愛したように、そのように人を愛せよ」

と。「愛せられたく」ではない。もうひとつ奥は「私がお前を愛したように、そのように人を愛せよ」ということです。これは「律法と預言者」を乗り越えるんです。私たちは、「せられんと思う」以上にキリストに愛されました。誰も私を愛してくれなくても、キリストは愛してください。誰が非難しようと、キリストは非難したまわらない。全部、十字架で引き受けている。

「沈黙は最大の復讐なり」

という言葉がある。私はいろんなことを言われても沈黙しています。弁護しません。何と言われても、私は

「結構です、ああそうですか」

と。何と言われても、「ああそうですか」でいい。白隠和尚がそうだったね。

けれども、私はこのキリストの愛には圧倒されるだけです。十字架をもって贖い尽くしてくださったこのキリストの愛。聖霊をもって限りなく生命づけてくださる、力を与え、知恵を与え、この愛には圧倒されるだけ。だから、

「私が愛したように人を愛せよ」

とは、

「この聖霊の愛をもって人を愛せよ。十字架の愛をもって人を愛せよ」

ということになる。「せられんと思う如く」ではない。

「せられたる如く」

なんです。



「愛せられた如く、愛せよ」
 なんです。人間的な相対的な「せられんと思う如く」ではない。

「私に愛された如く愛せよ」

ということですよ。これは新しい「黄金律」です。聖書の新約的黄金律は

「我に愛されたる如く、人を愛せよ」

です。棄身の愛です。「己の如く」なんてのはおよそ違う。キリストは天界で

「そっくだー！」

と言つてくださっている。万斛ばんこくの涙です、私は。

私はこの黄金律を瞑想しながら、何か足りないと思つたら、そこへ来たんです。

「愛されんと思う如く」

なんて、そんな人間的なそれどころのさわぎではない。キリストに愛されて、

「我に愛された如く、汝は人を愛せよ」

「はいっ、できます。あなたの力が来ますから」

と。

● ホワイト・ホール

今度、『エン・クリスト』第13号の扉にこういうことを書いた。

「ホワイト・ホール

宇宙には望遠鏡でも見えないブラック・ホールと呼ばれている星がある。彼らは超高度の密度のために光をも吸収してしまつからである。

北十字星座にもそういうブラック・ホールがある由。霊界の北十字星はキリストである。私は彼をホワイト・ホールと呼びたい。このホワイト・ホールも無相の相である。彼は聖霊の白光を神秘的に注いでいる。十字の相で彼はどの民族のどの人の魂の扉の前にも立っておられる。全存在を以て彼を呼べば直ちに入つて来られる。キリストがその人に按手し給つや否や、からだか霊的にしびれ聖霊の愛で全身が熱く充たされる。するとその人は新生命が入つて来たことを感じ、霊火が点じ、彼自身がホワイト・ホールになったことを覚える。それはキリストの中で無者とされたからである。この小さなホワイト・ホールからその人特有の光が美しくかがやく。」

(『エン・クリスト』第13号1983年2月冬季号)

そういう文章です。

そういうわけで、黄金律は新約的、黄金律となるわけです。

